

松田博嗣様

11th Sept, 1967

そちらももう大分涼しくなった頃と思います。ロンドンでは8月の始めから秋風が吹き始め、この頃は日によっては寒くてマフラーがほしい位です。私の滞在もあとわずかになり、目下荷物の始末や、conferenceの準備や、北欧でのlectureの準備などで忙しい状態です。そんなわけで仕事の方はこの前おしらせした所からあまり進んでいませんが、その後light atomの濃度が希薄な場合に対するgeneralized special frequency(GSF)のcritical mass ratioの計算を若干進めました。モデルや計算方法についてなお吟味が必要で、これはもうこちらでやる暇はなく帰ってからになります。今の所ではどのGSFのcritical mass ratioも皆2と3の間に来るという結果になりそうです。比較すべき数値実験がなく、たしかめられないのが残念で、“実験”が待たれます。(Poyton-Vincherの計算はパラメーターのえらび方が全く恣意的で比較にはあまり役に立ちません。)

こちらの新聞や雑誌を読んでいると、科学者の頭脳流出(brain drain)についての記事が目立ちます。先日のNPL News(National Physical Laboratoryの所内報)に“Brain Drain Reversed”と題して、海外に一旦流出してから英国にもどって来た人達の、戻って来た理由が並べてありました。

曰く、“この国には長い開放的な春があるのに、あちらでは4ヶ月もの間雪にとちこめられなければならなかった。”曰く、“LondonからWalesに旅行すると、平原から高山までの変化に富む風景があるのに、向うでは一日中ドライブしても景色が一向に変らない。”曰く、“London塔やSalisbury寺院のような古蹟がここにはある。”曰く、“この国はピクニックの場所に事欠かないのにあちらではこれに苦勞する。”等々。どれもあまり事の本質をついた理由とは思われません。ピクニックの場所や、長い春で科学者をつれ戻して喜ばなければならぬようでは、イギリスはやはり斜陽なのでしょう。

海外だより

か。二・三日前の新聞にこんな記事が出ていました。“ヨーロッパの病人”又は“little Britain”と世界才の工業力をもつ日本とのコントラストを考えるのは苦痛ではあるが有益なことだ。日本は1951に戦前の経済成長率を回復し、以来平均10%を保っている。それに対してイギリスは2%を割っている。1956年には Brunel を生んだ国であり、最初に大西洋横断の航路をもった国である我が国が造船で日本に追いこされ、今では日本が世界の総トン数の47%を作っている。また、Stephenson が初めて蒸気機関車を作った英国の国鉄が1億ポンドの欠損を出しているのに、日本の国鉄は黒字である上世界で最も速い。etc, etc, これらの表面的な比較をそのままごもっともというわけにはいかないにしても、やはり斜陽のようです。

しかしながら、それほどイギリスが斜陽で、日本が“The Land of the Rising Sun”なのなら、何故日本でも全く同じ brain drain という現象があるのでしょうか。いや、もし我々のコトバが英語だつたら、そして日本のピクニックの場所がイギリス程度しかなく、日本の自然がイギリス程度にしか変化がなく、日本の春がもっと短かく、日本に金閣寺や五重の塔がなかったら、brain drain はイギリスよりもっとひどくなるのではないのでしょうか。何故イギリスでは“地方都市”の Edinburgh で5週間にわたる大規模な Summer Festival が開けるのに、札幌や福岡ではオペラをやる会場さえないのでしょうか。

そして、早い話が、我々のサラリーが何故斜陽国イギリスの科学者の $\frac{1}{3}$ にすぎず、N P L がそれほど豊かでないにしても私に滞在費を支出できるのに、日本の大学では visiting reseasch fellow をよぶことが至難なのはなぜなのでしょう。

では帰って、またいろいろ教えていただくのをたのしみにしています。

堀 淳 一

---

ニ ュ ー ス

---

小寺武康氏 (東教大) ベルギー・ブラッセル大学より帰任